山形県における江戸時代後期の陶磁器の流通

－米沢市堤屋敷遺跡出土遺物を中心として－

菅原哲文

1　はじめに

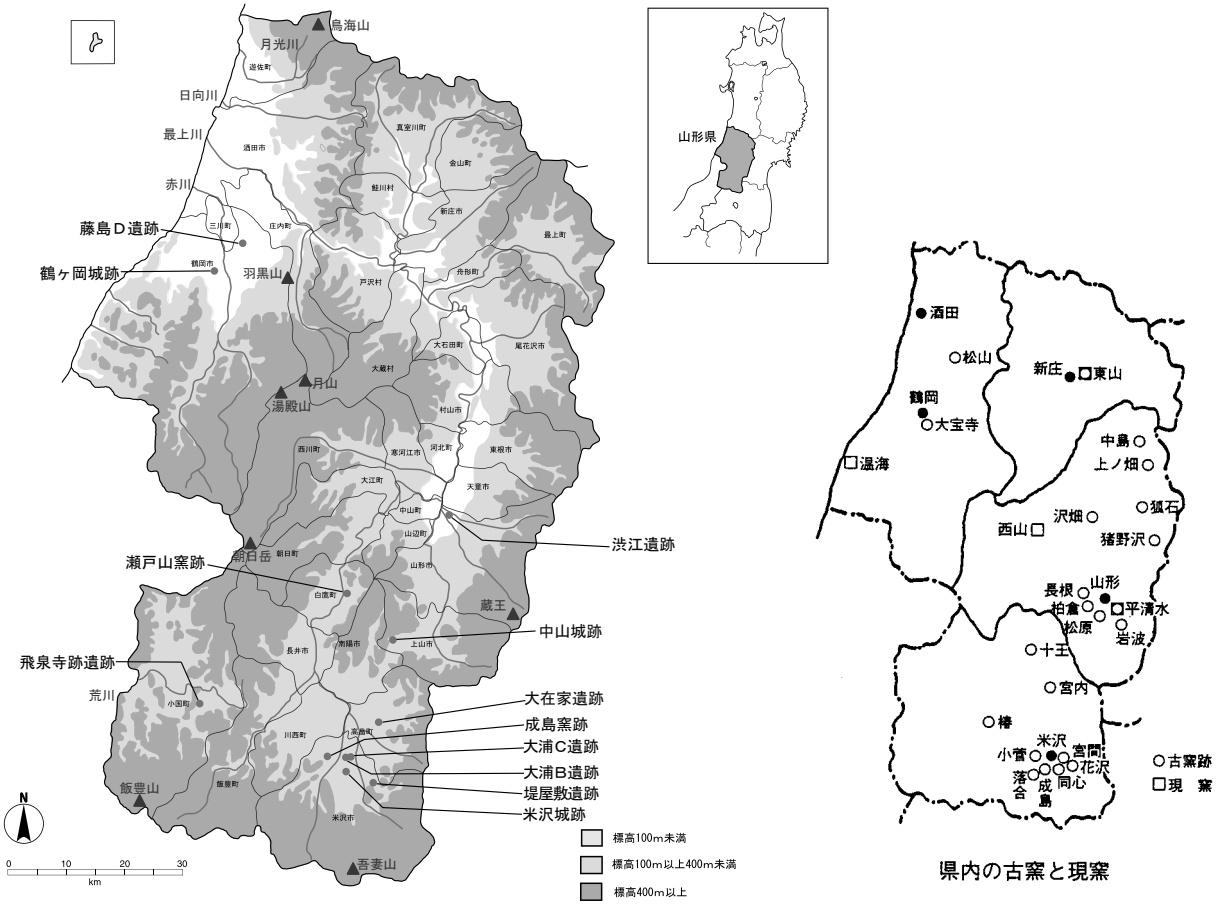
江戸時代後期になると、山形県内各地で、陶器や磁器を生産する在地の窯が盛んに操業するようになり、福島産の陶磁器の流入も拡大することで、九州の肥前陶磁器のシェアにとって代わるようになる。

県内の当期の概要について触れておく。主な江戸時代後期の遺跡と、窯跡の位置（板垣 2002）を第 1 図に示した。県南内陸部の米沢を中心とした置賜地方は、主に上杉氏の米沢藩領であり、陶磁器の流通や在地の窯の成立に、福島産の影響が強く見られる。当地方では天明元年（1781）に成島窯が開窯するが、その成立には相馬焼の職人を呼んで試し焼を行った、などの記述がある（註 1）。周辺地域には、南陽市宮内や白鷹町十王などの成島焼の系統を引く窯が存在する。

村山地方は、江戸時代当初、最上氏の山形藩であり、山形は城下町として整備された。当地方では、山形市の平清水が中心的な窯で、現在も操業している。当窯は文化年間頃から陶器の焼成を行っていた。弘化 4 年（1847）に磁器焼成に成功し、幕末から明治期以降の庶民層向けの陶磁器は、平清水が中心であったと考えられる。また、天保 4 年に県内で最初に磁器を焼いた窯として尾花沢の上の畑がある。こちらは献上品や贈答品の生産が中心と考えられている。

県北の新庄を中心とした最上地方は、戸沢氏の新庄藩領であった。当地方では、新庄東山焼が、陶器を主に生産する窯として、天保 13 年（1842）に開かれた。製品は海鼠釉が特徴的で、庄内の大宝寺焼と類似する。

日本海側の庄内地方は、主に酒井氏の庄内藩領であり、最上川河口に位置する酒田は、日本海沿岸の物流の玄関



第 1 図　山形県内の江戸後期遺跡分布図（左）・古窯分布図（右・板垣 2002 より引用）

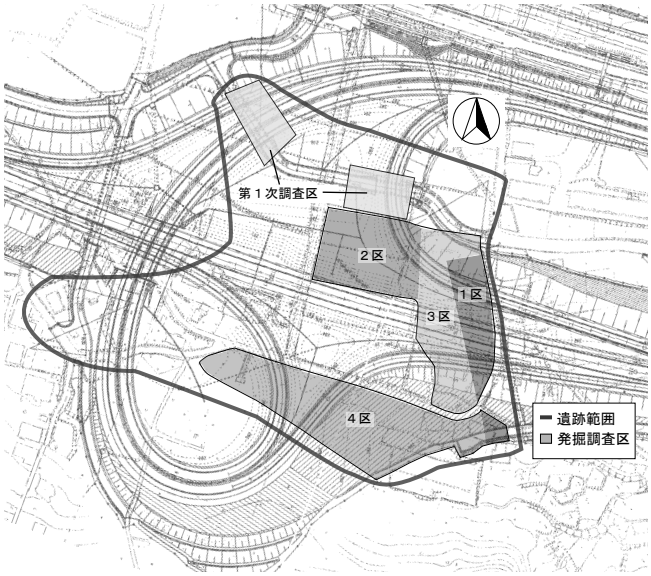
口としての役割を担う港町であった。庄内地方には、鶴岡に大宝寺焼がある。開窯の年代は不明であるが、記年銘資料として安永元年（1771）の記銘がある筆立てがあり、18 世紀末には操業していたと考えられる。

ここでは、江戸時代後期を中心とする陶磁器が出土した米沢市堤屋敷の出土遺物を分析し、当遺跡の近世陶磁器の流通の様相と、同時代の県内の陶磁器流通の様相について調査・研究したものである。

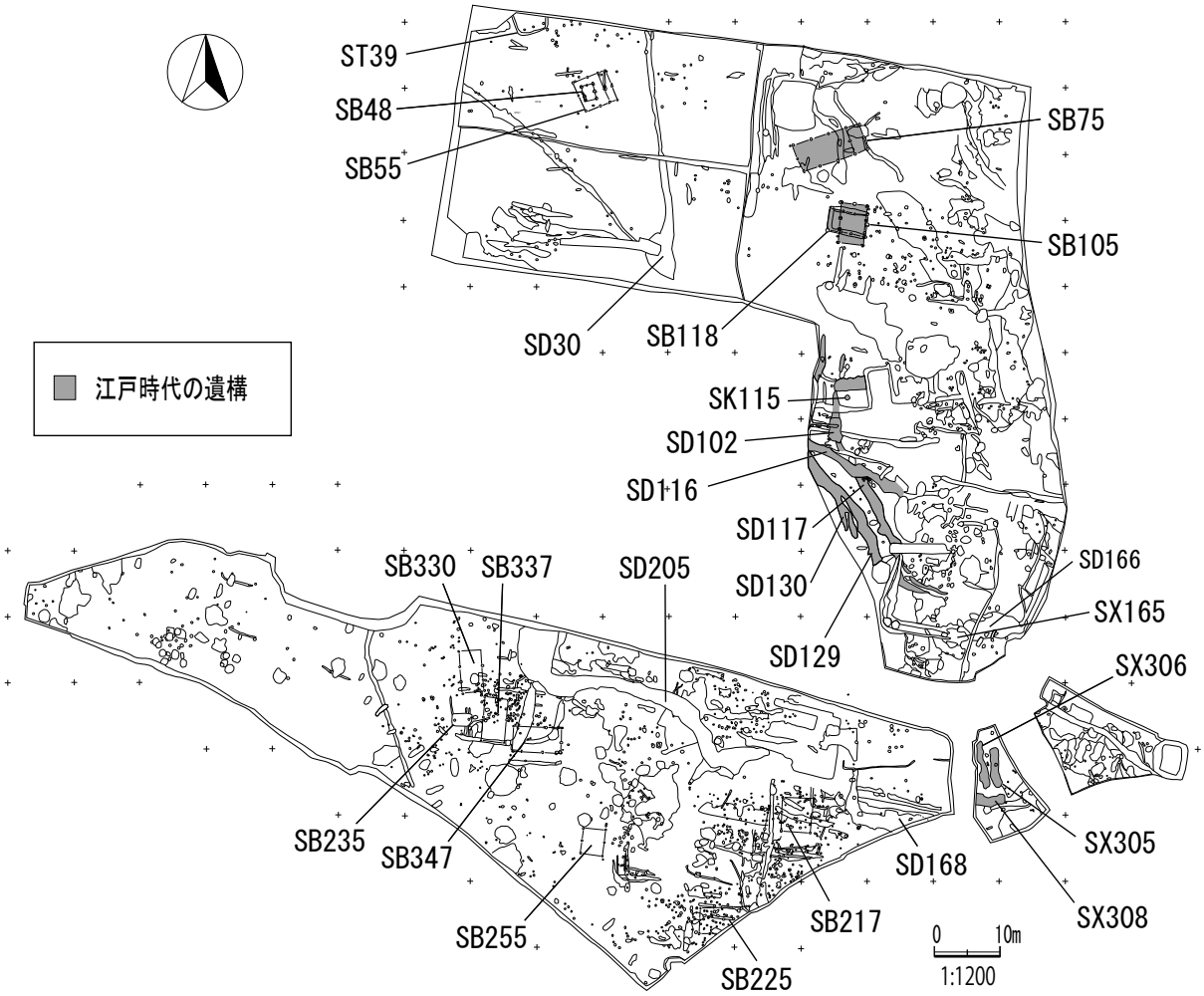
2　堤屋敷遺跡の概要

堤屋敷遺跡は米沢市万世町字桑山に所在する。米沢市街地から南東約 5km に位置し、南側には標高 502m の早坂山、東側には天王川（梓川）が北流する。立地は、早坂山の山腹の傾斜地と天王川による扇状地である。福島へ通じる街道沿いに位置する。

当遺跡は、東北中央自動車道（福島～米沢）新設事業により、平成 17 年に第 1 次調査が実施され、 中世の掘立柱建物跡 1 棟、土坑・柱穴が確認された（山形埋文 2006）。平成 19 年度の第 2 次調査は、調査面積延べ 10,000 ㎡について、調査区を 1 ～ 4 区に分けて実施し



第２図　堤屋敷遺跡調査区概要図（S ＝ 1：3,500）



第３図　堤屋敷遺跡遺構配置図

た（第２図）（山形埋文 2008）。今回報告するのは、現在整理中の第２次調査出土遺物である。検出された遺構と遺物の概要を述べる。１区では、江戸時代の建物の柱穴や土坑、溝跡が検出され、近世陶磁器や寛永通宝などの銭貨が出土した。家屋の基礎により撹乱を受け、近代以降の遺物が多い。２区は、主な遺構として平安時代の竪穴住居跡１棟、中世の掘立柱建物跡が２棟と溝跡 SD30 が検出された。３区は、江戸時代の集落域で３棟の掘立柱建物跡や溝跡が検出された。SB105・118 掘立柱建物跡は重複し、礎石や石の礎盤をもつ。SD116・117・129・130 などの溝跡からは、江戸時代の遺物が出土した。中世の SD166 溝跡から内耳土鍋が大量に出土した。焼土遺構 SX165 は、土器の焼成遺構の可能性も考えられる。４区は、中世の集落域である。外側に幅２mの溝が廻り、内側に掘立柱建物跡が繰り返し建てられている。建物群は４地点確認され、掘立柱建物跡が６棟、竪穴建物跡が１棟検出された。集落の外側を囲む溝跡（SD168・205）には、内耳土鍋を中心とした遺物が大量に廃棄されていた。江戸時代末の遺構は、墓壙が 10 基確認されている。

３　出土した近世陶磁器

江戸時代の３区 SK115 土坑・SD102・116・117・129・130 溝跡・４区 SX305・306・308 溝状遺構出土遺物を中心にとりあげる。SK115、SD102・116・117 出土遺物は、18 世紀後半～ 19 世紀中葉頃が中心である。SD129・130 の出土遺物は、18 世紀代を中心に 19 世紀前半のものも含み、やや年代幅がある。４区の SX305・306 は覆土の状態からほぼ同時期と考えられる。SX305・308 からは、18 世紀後半から 19 世紀中葉の遺物が出土している。いずれの遺構も、近代以降の撹乱などで遺物取り上げの際に撹乱の遺物が混入してしまう事があった。出土した陶磁器の特色は、以下の点が指摘できる（註２）。

磁器については、18 世紀代は、くらわんか手の碗・皿類が中心的に認められ、この時期は肥前産（２・７・15・27・40・46・55 ～ 57）で占められる。19 世紀代は、県内や東北産の可能性がある産地不明品の方が多い。肥前以外の染付磁器として、会津若松市の蚕養（こがい）焼が認められた。蚕養では、19 世紀中葉の天保年間から磁器生産が盛んに行われていたと考えられている（柳田 1990）。確認された器種は碗のみである。

陶器について述べたい。肥前陶器は、呉器手の碗が SD129 から比較的見られる（29 ～ 34）。SD117 からは、京焼風陶器（25）が出土しているが稀である。碗以外の器種は乏しく、18 世紀後半以降はほとんど確認されない。

福島市の岸窯製品が認められる。当窯は 17 世紀前半から 18 世紀前半～中葉頃まで操業していたと考えられる（福島市振興公社 1998）。擂鉢（35 ～ 37）が中心と思われるが、甕（38）・皿（23）、また、香炉・小皿・ヒダ皿などの小物類などの器種のバリエーションが認められる。18 世紀代の遺物を伴う遺構から出土する傾向がうかがわれ、主に碗以外の器種が流通していると考えられる。

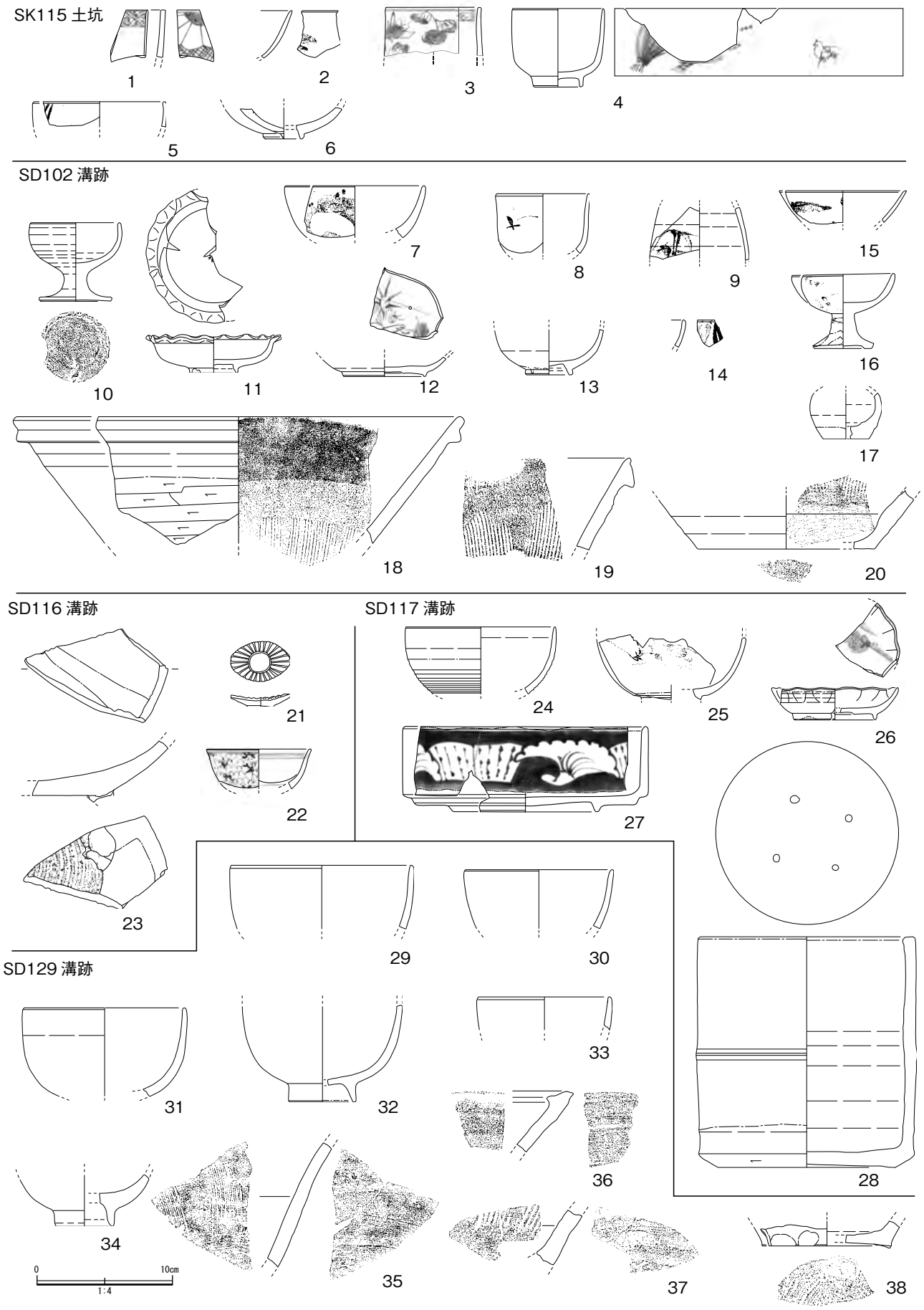
福島県浪江町で生産された大堀相馬焼は、18 世紀後半から 19 世紀代にかけての流入が多い。陶器の碗が大半で、灰釉腰折碗（61）・腰錆碗（61）・糠白釉碗（13・50）が認められる。鉄絵の皿、土瓶、徳利（60）、仏飯器（16・43）などの器種も出土している。

福島県会津美里町本郷地区で生産されていた会津本郷焼と考えられる陶器の擂鉢・鉢が確認される。18 世紀代の擂鉢（19・20）が比較的認められる。遺構外出土であるが、古新製の碗・皿が各１点出土している。

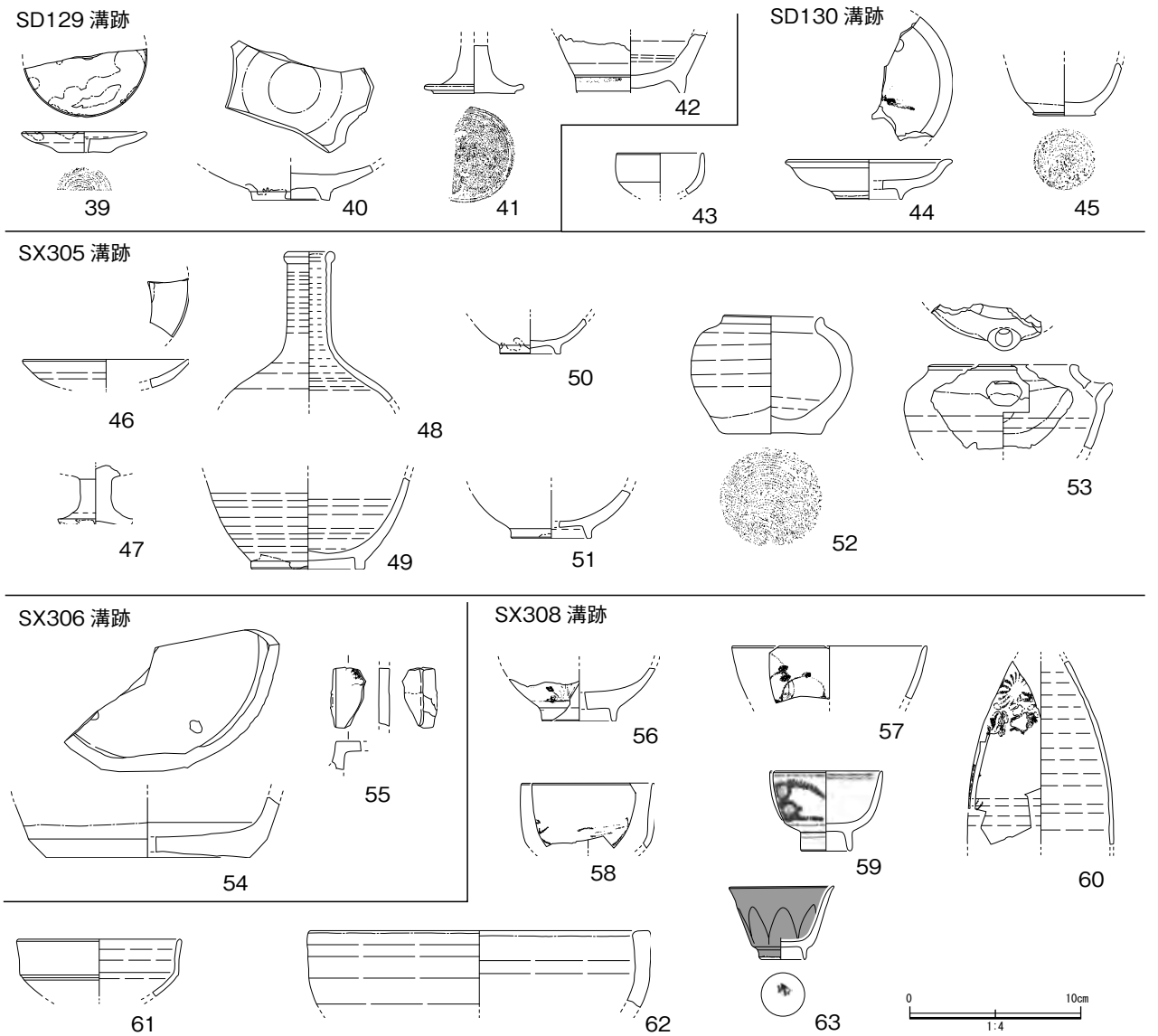
在地の成島系陶器は（註３）、擂鉢（18）・切立（28）・甕・鉢・火入・餌猪口などが確認された。擂鉢が特に多く、切立・甕がそれに次ぐ。18 の擂鉢は、卸目の上端にナデ調整が施される 19 世紀第２四半期以降のもので、28 の切立は口縁部が無釉で、内面の目跡が円形を呈するものでやや古手の様相を示す（註４）。

４　置賜地方の他遺跡の様相

江戸時代後期を中心とする置賜地方の他遺跡の事例を検討する。城館跡として、米沢城跡（山形埋文 1999）の調査があげられる。米沢城は慶長３年（1598）に上杉景勝が会津に移封された後は上杉氏の所領となった。明治３年に堀・土塁・二の丸寺院が破却された。山形県埋蔵文化財センターにより平成 10 年に実施された二の丸堀跡の調査では、5,000 ㎡が調査され、底面に格子状の障壁をもつ「障子堀」であることが明らかになった。



第４図　堤屋敷遺跡出土近世陶磁器



第５図　堤屋敷遺跡出土近世陶磁器

表１－１　堤屋敷遺跡出土陶磁器観察表

番号	地区	出土遺構	種別	器種	産地	年代・文様・釉・備考
1	3 区	SK115	磁器染付	筒形碗	肥前系の可能性	1770 ～ 1810 年代・（外面）菊花文・（内面）四方襷文
2	3 区	SK115	磁器染付	碗	肥前	18C 前～中・（外面）松文
3	3 区	SK115	磁器	筒形碗	肥前系あるいは在地	（外面）草花文・（内面）四方襷文
4	3 区	SK115	磁器	碗	蚕養	19C 中葉・（外面）稲束に雀文
5	3 区	SK115	陶器	碗	関西系	18C 後半・（外面）色絵（赤・緑）
6	3 区	SK115	陶器	碗	関西系	18C 後半
7	3 区	SD102 撹乱	磁器染付	碗	肥前（波佐見）	18C 後～ 19C 初・（外面）雪輪草花文
8	3 区	SD102 撹乱	磁器染付	深小丸碗	蚕養	19C 中葉・（外面）蝶文
9	3 区	SD102 撹乱	磁器染付	徳利	不明	19C 前～幕末・（外面）笹文
10	3 区	SD102 撹乱	陶器	仏飯器	不明	19C
11	3 区	SD102 撹乱	磁器染付	ヒダ皿	不明	19C
12	3 区	SD102	磁器染付	輪花皿	肥前系（在地の可能性も）	19C 前半～幕末・（内面）草花文・内面に目跡一カ所
13	3 区	SD102	陶器	碗	大堀相馬	（内外面）糠白釉
14	3 区	SD102	陶器	碗	関西系	18C・（外面）色絵（赤・緑）
15	3 区	SD102	磁器染付	碗	肥前	（外面）草花文
16	3 区	SD102	陶器	仏飯器	大堀相馬	19C・（外面）鉄絵・白色釉？
17	3 区	SD102	陶器	小瓶	不明	18C 末～ 19C 初・（外面）鉄釉
18	3 区	SD102	陶器	擂鉢	成島系	19C 第２四半期以降・（口縁内外）灰釉・（体部内外）鉄釉
19	3 区	SD102	陶器	擂鉢	会津本郷	18C・（内外面）鉄釉
20	3 区	SD102	陶器	擂鉢	会津本郷？	18C・（内外面）鉄釉・内面底部磨滅
21	3 区	SD116	白磁	紅皿	不明	明治以降・型押し成形
22	3 区	SD116-F1	磁器染付	小坏	不明	1820 ～ 60 年代・（外面）唐草文？
23	3 区	SD116-F1	陶器	大皿	岸	（外面）鉄釉・（内面）鉄釉に灰釉
24	3 区	SD117	陶器	碗	大堀相馬	18C・（口縁外面・内面）灰釉・（外面体部下半）鉄釉・貫入
25	3 区	SD117-F1	陶器	碗	肥前	18C 後半～・京焼風・貫入・SX165 からも出土

表１－２　堤屋敷遺跡出土陶磁器観察表

番号	地区	出土遺構・層位	種別	器種	産地	年代・文様・釉・備考
26	3 区	SD117-F2	磁器染付	輪花皿	不明	18C 末～幕末・（外面）山水文・口紅
27	3 区	SD117-F2	磁器染付	段重	肥前	1770 ～ 19C 代・焼き継ぎ・（外面）銀杏文・書物？
28	3 区	SD117	陶器	切立	成島	（内外面）鉄釉・円形の目跡４ヶ所
29	3 区	SD129-F1	陶器	碗	肥前	17C 後半～ 18C 初・呉器手・貫入
30	3 区	SD129-F1	陶器	碗	肥前	17C 後半～ 18C 初・呉器手・貫入
31	3 区	SD129-F1	陶器	碗	肥前	17C 後半～ 18C 初・呉器手
32	3 区	SD129-F2	陶器	碗	肥前	17C 後半～ 18C 初・呉器手・貫入
33	3 区	SD129	陶器	碗	肥前	17C 後半～ 18C 初・呉器手
34	3 区	SD129	陶器	碗	肥前	17C 第四半期～ 18C 第 1 四半期・呉器手
35	3 区	SD129-F1	陶器	擂鉢	岸	SD134 からも出土・（内外面）鉄釉
36	3 区	SD129-F1,2,3	陶器	擂鉢	岸	（内外面口縁）灰釉
37	3 区	SD129-F1,2,3	陶器	擂鉢	岸	
38	3 区	SD129・130	陶器	甕	岸	漆接・鉄釉
39	3 区	SD129・130	陶器	蓋	不明	（内外面）鉄釉＋灰釉・ツマミの痕あり
40	3 区	SD129-F1	青磁	青磁皿	肥前（波佐見）	18C 後半・蛇ノ目釉剥ぎ
41	3 区	SD129-F1	磁器	仏飯器	不明	
42	3 区	SD129-F1	磁器染付	壺	肥前系か在地	18C 末～ 19C 前・（外面）圏線
43	3 区	SD130-Y	陶器	仏飯器	大堀相馬	19C・（内外面）糠白釉
44	3 区	SD130-F2	陶器	皿	大堀相馬？	19C・（内面）鉄絵あり
45	3 区	SD130	陶器	小壺	不明	（外面）鉄釉
46	4 区	SX305	磁器	皿	肥前	17C 後半～ 18C 前半・（内面）釉剥ぎ状の痕跡
47	4 区	SX305-F1	磁器	仏飯器	肥前系	18C 後半～ 19C 前
48	4 区	SX305-F	磁器	徳利	不明	（内外面）灰釉
49	4 区	SX305-F1	陶器	徳利	不明	（内外面）灰釉・48 と同一の可能性
50	4 区	SX305-F3	陶器	碗	大堀相馬	19C 前半・（外面）鉄釉・（内面）糠白釉
51	4 区	SX305	陶器	碗	大堀相馬	18C・（内外面）灰釉
52	4 区	SX305	陶器	小壺	岸	（外面）灰釉
53	4 区	SX305-F1	陶器	土瓶	不明	（内外面）白色釉・（内外面口縁）灰釉
54	4 区	SX306-F1	陶器	鉢	会津本郷	（内外面）白色釉
55	4 区	SX306	磁器染付	花入	肥前	17C 後～ 18C 前
56	4 区	SX308	磁器染付	碗	肥前	18C 前半・（外面）草花文
57	4 区	SX308	磁器染付	碗	肥前	18C 前半・（外面）草花文
58	4 区	SX308	磁器染付	深小丸碗	在地	1820 ～ 1860 年代・漆接
59	4 区	SX308	磁器染付	小碗	東北	（外面）山水文？
60	4 区	SX308	陶器	徳利	大堀相馬	19C・（外面）花文（染付）
61	4 区	SX308	陶器	碗	大堀相馬	18C・（内外面）灰釉
62	4 区	SX308	陶器	鉢？	会津本郷？	（内外面）鉄釉
63	4 区	SX308	磁器	小坏	不明	明治以降・瑠璃釉（人工コバルト）・高台内銘

堀の覆土は、上層・中層・下層に分層され、上層は近代、中層は 18 世紀後半～ 19 世紀前半の遺物、下層は 17 世紀初頭～ 19 世紀前半の遺物が出土している（山形埋文 1999）。やや時間幅のある資料であるが、当地方の陶磁器の流通を反映するものと考えられる。肥前産磁器については、碗では、雪輪草花文や二重網目文が施される丸碗・コンニャク印判が施される碗・腰張碗・筒丸碗がみられる。肥前産陶器は、碗・皿が確認されるが、碗が主であり、呉器手・緑釉流し掛け・京焼風がある。擂鉢・甕・鉢はみられない。岸窯製品は、下層からの出土が多く認められるが、上層からも、擂鉢・鉢・皿などが出土している。大堀相馬焼は、碗類が主で、灰釉碗・腰錆碗・糠白釉碗がある。会津本郷焼は、碗・皿もあるが、鉢・火入・瓶・花瓶・擂鉢などの器種が出土している。在地の成島焼は、切立が出土している。米沢城跡の肥前磁器には、型打成形による陽刻の文様が施された輪花皿・鉢や、有田産と考えられる装飾性に富む皿類が見られるが、これらは堤屋敷遺跡では確認されておらず、城館という遺跡のランクによるものと見られる。

陶磁器の産地組成（表３）であるが（註５）、中層で肥前産磁器が全体の 42.4％、磁器類の８割を占める。次いで多いのが大堀相馬焼で 12％、肥前産陶器が 7.6％、会津本郷 6.3％と、福島産陶器が陶器類の多くの割合を占める。瀬戸・美濃系陶器は少なく１％に満たない。器種との関係であるが、碗・皿類は、肥前産の磁器・陶器が主体で、それに大堀相馬が一部を補完し、鉢・擂鉢やその他の器種は、福島産や在地の陶器類が主体を占める関係にあるといえる。表２に、堤屋敷遺跡の陶磁器組成を示した（註６）。各遺構の個体数が少ないため、３区 SD129・130、４区 SX305・306・308 がそれぞれ同時期に機能していた溝跡と考えられるので合計して集計し、３区 SK115・SD102・116・117 も概ね同時期と考えて集計した。SD129・130 は主として 18 世紀代から 19 世紀前半の遺物を含み、その他は、18 世紀後半から 19 世紀中葉にかけての資料と捉えられる。米沢城跡（表３）と比較すると、米沢城の磁器類は肥前磁器が

中心であるが、堤屋敷遺跡は産地不明の磁器の比率が高い。米沢城跡よりも時期的に後出する様相が反映されているものと考えられる。陶器は、肥前陶器が碗類などの限られた器種の流通に限定されるが、19 世紀代になると消滅し、その他の産地は福島の岸・会津本郷・大堀相馬などで占められる様相は両遺跡共通である。成島系陶器の比率が堤屋敷遺跡がより高いことも時期的な傾向と考えられる。

次に、高畠町大在家遺跡を検討したい。当遺跡では、米沢城跡出土資料より新しい 19 世紀後半の資料が報告されており（山形埋文 2006）、堤屋敷遺跡出土遺物の時期に近いと考えられる。遺跡は、高畠町市街地中心部に位置し、江戸時代には幕府の代官所が置かれた高畠城の城下町である。発掘調査区は城下町の横町通りに相当し、町屋が形成されていた。文献では、文化７年（1810）・文政６年（1827）の高畠城火災、明治３年（1870）・６年（1873）の高畠村大火の記録がある。調査区の焼土層は、これらの火災に関連すると考えられる。中でも SX2205 土坑は一括性が高く、幕末頃の大火後の整地層と考えられている（註 6）。肥前の染付磁器には、くらわんか手の丸碗・筒形碗・端反碗・小碗・蛇の目凹形高台の皿・徳利などが認められる。瀬戸・美濃系磁器は、筒丸碗のみが認められる。産地不明の磁器は、内面に４ヶ所の目跡の端反皿・目跡がある皿・小広東碗・型打ち成形の角皿がある。陶器は、肥前の鉢・在地の成島系陶器の切立・秉燭・甕・擂鉢、京焼の急須、大堀相馬の飛び鉋の蓋があり、産地不明のものもある。

この 19 世紀後半の SX2205 出土陶磁器（報告書掲載および未掲載遺物）の産地組成は、肥前磁器が８％未満、蚕養が２％未満、産地不明磁器が約 50％、成島系陶器約９％、大堀相馬が６％未満、瀬戸美濃が約３％、肥前陶器、京焼が１％未満、産地不明陶器が約 20％である。やはり米沢城よりも産地不明の磁器がかなり多い。しかし福島産陶器の比率は多くはなく、代わって成島系陶器や産地不明陶器が多いようである。

表２　堤屋敷遺跡出土陶磁器の産地組成

３区SD129・130出土陶磁器の産地組成

	肥前磁器	蚕養	不明磁器	肥前陶器	京・信楽	岸	大堀相馬	会津本郷	成島	不明陶器	
SD129	1		3	9		3	1		1	2	
SD129・130				1		1	1			2	
SD130	2			2			2			4	
計	3	0	3	12	0	4	4	0	1	8	35
	8.57%	0.00%	8.57%	34.29%	0.00%	11.43%	11.43%	0.00%	2.86%	22.86%	

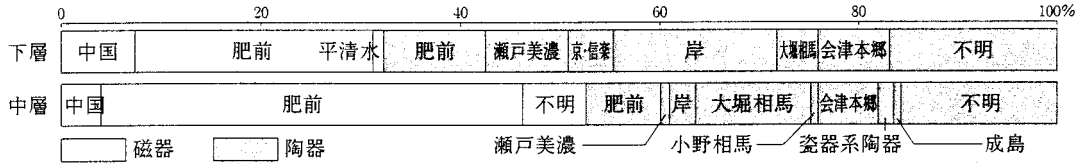
３区SK115・SD102・116・117出土陶磁器の産地組成

	肥前磁器	蚕養	不明磁器	肥前陶器	京・信楽	岸	大堀相馬	会津本郷	成島	不明陶器	
SK115	2	2	3		2						
SD102撹乱	2	1	5				2	1	2	6	
SD102	4		5		1		7	2	2	8	
SD116	1		4			2	5		1	4	
SD117	2		2				1		2		
計	11	3	19	0	3	2	15	3	7	18	81
	13.58%	3.70%	23.46%	0.00%	3.70%	2.47%	18.52%	3.70%	8.64%	22.22%	

４区SX305・306・308出土陶磁器の産地組成

	肥前磁器	蚕養	不明磁器	肥前陶器	京・信楽	岸	大堀相馬	会津本郷	成島	不明陶器	
SX305	2		1			1	2			4	
SX306	3		1				2	1		1	
SX308	2		8			2	8	1	5	3	
計	7	0	10	0	0	3	12	2	5	8	47
	14.89%	0.00%	21.28%	0.00%	0.00%	6.38%	25.53%	4.26%	10.64%	17.02%	

表３　米沢城二の丸堀跡出土陶磁器の産地組成（高桑 2002 より引用）



	中国	肥前磁器	平清水	不明磁器	肥前陶器	瀬戸美濃陶器	京・信楽
下層	5 (7.0%)	17 (23.9%)	1 (1.4%)	0 (0.0%)	7 (9.9%)	6 (8.5%)	3 (4.2%)
中層	6 (3.8%)	67 (42.4%)	(0.0%)	10 (6.3%)	12 (7.6%)	1 (0.6%)	0 (0.0%)

	岸	大堀相馬	小野相馬	会津本郷	成島	瓷器系陶器	不明陶器	合計
下層	12 (16.9%)	3 (4.2%)	0 (0.0%)	5 (7.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	12 (16.9%)	71
中層	4 (2.5%)	19 (12.0%)	1 (0.6%)	10 (6.3%)	2 (1.3%)	1 (0.6%)	25 (15.8%)	158

5　まとめ

山形県の江戸後期を中心とした陶磁器の様相であるが、堤屋敷遺跡を中心とする陶磁器の検討を行った結果、以下の内容が指摘される。

内陸の置賜地方では、城館跡や集落跡を含めて、18世紀後半以降に、福島の大堀相馬・会津本郷が肥前陶器と入れ替わるようにして、陶器の流通の主体を占めるようになる。18世紀末には福島の窯の影響を受けて成島窯が成立するが、その後の19世紀代にかけて擂鉢・甕・切立・壺・鉢等で陶器の消費をまかなうようになる。特に、擂鉢や甕・鉢類は、19世紀に入ると会津本郷と成島のシェアが入れ替わる事が確認される。成島であまり生産されないと考えられる碗・皿類については、福島産陶器が引き続き消費される。磁器は、地元で生産できない18世紀は肥前で占められるが、19世紀以降は、会津若松市の蚕養焼などの福島産の磁器が伴う。19世紀中葉以降では、堤屋敷遺跡や高畠町大在家遺跡の様相などから、東北地方で生産された可能性がある産地不明の製品が肥前を凌ぐようになるなど消費に占める割合が増加する。一方、瀬戸・美濃系磁器の流通は希薄であり、流通が盛んになるのは明治期に入ってからである。

村山地方や庄内地方の様相と比較すると、村山地方の場合、集落出土資料ではないが、江戸後期の墓壙出土資料である渋江遺跡（山形埋文2002b）の様相から判断すると、福島産陶磁器の流通が活発であったと考えられる。山形市には、文化年間に開窯した平清水焼があり、今後、在地陶磁器の消費の様相が明らかとなる良好な資料の報告が望まれる。

庄内地方は、日本海沿岸の物流の窓口であり、肥前陶磁器の流通は優位であるといえる。鶴ヶ岡城跡の様相では、18世紀代は、肥前磁器を主体として、肥前陶器も幅広い器種が認められる（山形埋文2002a）。

19世紀代は、肥前磁器が依然磁器の中心を占めるが、肥前陶器は減少する。代わりに、在地の大宝寺焼が甕・鉢・徳利類などを中心にその補完となる。また、産地不明の陶器も多い。瀬戸・美濃系陶器は、19世紀に入ると散発的に出土が認められる。19世紀後半になると、磁器染付碗類の流入が目立つ。

以上のように、山形県における内陸部では、18世紀後半から肥前の陶器にかわって福島県産陶器の流入が盛んになる段階、19世紀前半頃から、在地の成島系陶器の製品が福島産陶器と器種ごとに使い分けが行われてゆく段階、19世紀後半以降は在地や東北地方産の可能性がある磁器消費が活発化する段階と捉えられる。このことは、肥前製品が流通しやすい日本海側とは対照的な在り方を示している。日本海側では、舟運による陶磁器の輸送が主であるが、内陸部では陸路もしくは最上川の舟運が主と考えられる。碗・皿以外の甕・擂鉢・鉢などの大型品は、肥前などの遠隔の生産地では内陸までの輸送コストがかさむことから、近接する福島などの生産地が選択されていると考えられる。

最後に、堤屋敷遺跡出土陶磁器の生産地の比較検討では、多くの方々に御教示いただいた。感謝申し上げたい。

註1）　上杉文書『背曝』天保３年（1832）７月の書に記載がある。
註2）　陶磁器の産地同定については、以下の方々に遺物を実見していただき、御教示いただいた。大橋康二氏・関根達人氏・飯村均氏・吉田博行氏・近藤真佐夫氏・堀江格氏・山下峰司氏・藤澤敦氏・高橋拓氏・國井修氏。
註３）　置賜地方には、成島焼とその系統を引く小菅焼・菖蒲沢焼・十王焼などの窯があり、現時点ではこれらの窯跡製品の判別は困難である。このため、板垣英夫氏にならって、これらの成島焼やその系統を引く陶器を、「成島系陶器」と呼称しておく。
註4）　高橋拓氏の御教示による。
註5）　高桑登2002による米沢城跡出土陶磁器の産地組成である。
註6）　個体数の算定は、接合後の破片数をカウントした。
註7）　明治初期と考えられる遺物も含まれている。
註8）　報告書未掲載遺物を含めて、接合後の293破片を検討した。比熱して黒変し産地が特定不可能な遺物もあるため、産地不明の磁器・陶器の割合がやや多くなっている。

参考・引用文献

板垣英夫2002「山形県の近世の焼き物の特集にあたって」『羽陽文化』147　pp.2-7
財団法人福島市振興公社1998『岸窯跡』福島市埋蔵文化財報告書第111集
財団法人山形県埋蔵文化財センター1999『米沢城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第66集
財団法人山形県埋蔵文化財センター2002a『鶴ヶ岡城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第99集
財団法人山形県埋蔵文化財センター2002b『渋江遺跡第４次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第106集
財団法人山形県埋蔵文化財センター2006『大在家遺跡第１次・２次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第153集
財団法人山形県埋蔵文化財センター2006『稲荷山館跡・堤屋敷遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第156集
財団法人山形県埋蔵文化財センター2008「堤屋敷遺跡」『年報平成19年度』
高桑登2002「山形県米沢城跡における食器組成」『東洋陶磁』31　pp.29-42
柳田俊雄1990『蚕養窯跡発掘調査報告書』会津若松市文化財報告書第15号